



季節を知ったら  
暮らしが楽しくなった

〜第二八六号〜

立冬

十一月八日

## 御幣鯛の奉納

今年も伊勢湾を渡って、伊勢神宮の神嘗祭に供える干鯛が運ばれました。十月十二日、勢田川河口の神社港で今か今かと篠島からの船が着くのを待ちました。この日は北寄りの強風が吹き、九時到着が遅れていたのです。

十数分遅れで、湾口に神社港から迎えにいった水先船に先導され、六隻の漁船が入ってきました。

篠島の一行は、漁協組合長らおよそ六十人。いづれも礼服を着用しています。栈橋に着いた船から、「御幣鯛」を納めた辛櫃二つが下ろされると、ぷーんと潮の香がしました。

式典では、一行を迎えた地元の自治会長が。「今年で二十一年続き、神社港としても年中行事になりました。九月に地元のお祭りが終わると、次は御幣鯛だと」とあいさつしました。古くから愛知県の篠島で作られた干鯛は、船で運ばれていましたが、昭和三年に途絶えます。しかし、平成十年、再び神宮から下された「太一御用」の旗を掲げ、船で伊勢へ運ぶようになったのです。復活して二十一回目、地元では年中行事の一つに根付いていました。

神社港で下ろした干鯛は、内宮へ。篠島の人々が辛櫃を担いで宇治橋を渡り、五丈殿前で神宮へ目録を手渡す奉納式が行われました。今回は神嘗祭用の百六十尾が納められました。傍らの案（台）に置かれた大小の干鯛。大の方は、四十センチはある大きな鯛でした。干鯛は腹開きして内臓を除き、塩を腹につめ、桶に重ねおきます。そして約一週間のち、天日に干すのです。そうして作られた干鯛は、見るからに硬そうでした。大きな干鯛は、天照大神をまつる正宮用の神饌（しんせん）となったそうです。

文 千種清美



# おかげの里便り

おかげ横丁

## ○ 第16回神恩感謝日本太鼓祭

全国各地の郷土色豊かな太鼓が伊勢に集い、日々太鼓が叩ける喜びと感謝の思いを太鼓の音に乗せ、神様に奉納します。

と き／11月10日(土) 10:00～17:30

11日(日) 9:30～17:30

ところ／伊勢内宮前おかげ横丁一帯(雨天一部内容変更あり)

入 場／無料

出演団体:太鼓芸能集団 鼓童(新潟県)、豊の国ゆふいん源流太鼓(大分県)、御陣乗太鼓保存会(石川県)、三宅島芸能同志会(東京都)、愛宕陣太鼓連響風組(福島県)、熊野鬼城太鼓(三重県)、備中温羅太鼓(岡山県)、舞太鼓あすか組(奈良県)、和太鼓集団 志多ら(愛知県)、霧島九面太鼓 和奏(鹿児島)、神恩太鼓(三重県)、見留知弘・ヒダノ修一(新潟県・神奈川県)

五十鈴川河川敷特設舞台オープニング演奏:和太鼓グループ 響座いなせ組、南島豊漁太鼓、四日市諏訪太鼓龍雅、美里龍神太鼓(三重県選抜)

## ● 奉納太鼓演奏

と き／11月10日(土)、11日(日) 9:30～17:30(会場により異なる)

ところ／おかげ横丁「太鼓櫓」、五十鈴川河川敷特設舞台、五十鈴川野遊びどころ中庭会場 他

## ● ミニ太鼓作り(協力:(株)浅野太鼓楽器店)

ケヤキの胴に革を張る、本格派の太鼓を作っていただけます。

と き／11月10日(土)、11日(日) 12:30～14:00(約90分)

※当日10:00より受付

ところ／横丁棋院

参加費／有料(両日とも1日先着20名 ※一家族につき2つまで。中学生以下のお子様の場合、一人につき保護者一名の同伴が必要。)

五十鈴塾

## ○ 幕末の伊勢神宮

今年(2023年)は明治維新150年の節目の年でした。NHK大河ドラマ「西郷どん」も幕末動乱を経て明治維新を迎える佳境に入りましたね。また北海道の名付け親・松浦武四郎生誕200年の佳年にもあたり、マスコミも報道で取り上げ、何かと三重県でも話題になっています。

この幕末期は吉田松陰や坂本龍馬等歴史上傑出した人物が活躍した時期でもあり、日本人が最も好きな時代のひとつでもあります。文明開化を迎える前のこの時期、神宮では世の喧噪に棹を差し、どのような対応をしていたのでしょうか。実は幕末の伊勢神宮の動向については、ほとんど紹介された例がなく、国民が知見を得る機会もなかったからか、誰も知らない真相があります。郷土の偉人、松浦武四郎や竹川竹齋も活躍しますが、足代弘訓等神宮祠官も海防に対する神宮防衛問題に首を突っ込み、危ない行動もします。歴史上の意外な人物も関わっていますから、面白いです。今回は「ええじゃないか」の紹介も含め、知られざる幕末の伊勢神宮の動向について解説します。

と き／11月13日(火) 13:30～15:00

講 師／音羽 悟(神宮司庁広報室広報課課長)

参加料／一般1,300円 会員800円

ところ／五十鈴塾右王舎

※お問い合わせ・お申込み 0596-20-8251

五十鈴茶屋

## ○ 節気菓子

こう  
よう  
紅葉

伊勢路の景色は、未だ秋の名残りを留めています。紅葉の盛りを表す二色のきんとん。行く晩秋を惜しんで染めた彩りです。

くり  
栗かのこ

夕焼けが終わり、やがて伊勢路の空に浮かぶのは、明るく冴えた月の姿。鹿の子模様の餡玉に栗をのせて、月が映える澄んだ秋の夜空に似せました。

もち  
うずら餅

草深い野の情景を連想させる鶉は、万葉の時代から詩に詠まれてきました。栗と粒餡を求肥で包み、可愛い鶉の姿をお菓子のかたちで写し取りました。